地域の分析センターとしても

工学部環境化学工学科　田　中　豊　助

その時点で、最高の能力がある機器を準備して、学問研究の態勢をととのえ、大学の教官どなたにも、利用できる分析センターが働いていることは、埼玉大学に学問の伝統が刻まれていることである。

分析センターの機構の１部分が、埼玉県地域に公開されることを希望する。ものの本質を知るのに分析をしたいという事情は、いろいろな分野で起る。国立、公立の研究所、試験所があり、企業でも、利にあわせて、この種の分析をやってくれ、疑問に答えてくれる。しかし、十分でなく、それらに依頼する条件も見つからないまゝにいる場合が多い。

雷を研究する物理学者が、化学専攻の私に疑問をたずねてこられた。土木作業をしていた人に落雷し、麦わら帽子を残して死んだ。帽子に通気の金具の鳩目があって、それが落雷の直撃で蒸着したのか、帽子の一部に痕跡がある。この痕跡の成分を知りたいということである。私は、この分析センターのメンバーである方に、あらためて、この問題をたずねて、Ｘ線マクロアナライザーという超微量分析装置で分析する方法を教えてもらった。さらに、この装置の分析結果から、まことにわずかな量の成分が、美事に、つきとめられた。そして落雷の１現象の機構が明らかにされた。

このような分析の相談などに、分析センターのメンバーの頭脳と識見、エネルギーの一部を、とりあえず、この埼玉県地域のひとびとに、割いてもらいたい。

大学の学問は何ものからも束縛をうけてはならないし、それはまた万人に公開されるべき共通のものと思われる。大学の歴史の長いヨーロッパでは、文系、理系いずれにおいても、社会への公開講座などというシステムでこの種のことが百数十年前から、続けられ、伝統となっている。